

〈原著論文〉

成人看護学実習における協同学習を取り入れた「術後観察演習」 の学習効果の検討

Effects of Postoperative Observational Exercises Incorporating Cooperative Learning
in the Clinical Practice of Adults Nursing

三浦 恭代¹, 藤原 尚子², 高見 清美³

要旨

協同学習を取り入れた術後観察演習が成人急性期実習に及ぼす学習効果について明らかにすることを目的とし、自記式質問紙調査を実施した。調査票は、受け持ち患者の概要、演習資料の活用、成人急性期実習における事前学習の取り組み、成人急性期実習における術後観察の経験について質問した。学習効果の指標として、主体的授業態度尺度および、特性的自己効力感尺度を用いた。研究に同意が得られた74名を分析対象とした結果、学生は成人急性期実習において、術後観察演習の資料を活用し、実習に臨んでいた。また、術後観察演習を具体的に想起しながら実際の術後観察を実践していた。したがって、術後観察演習は、成人急性期実習において十分に活用できる内容であることが示唆された。しかし、学習効果との関連を明らかにすることはできなかったため、協同学習に関する要因のさらなる検討が必要であることが示された。

キーワード：成人看護学, 協同学習, 術後観察, 学習効果

adults nursing, cooperative learning, postoperative observation,
learning effects

I. 緒言

学士課程の看護基礎教育は、大学における看護系人材養成の在り方検討会（文部科学省，2011）の提言に基づき、環境の変化にかかわらず看護の基礎を教育し、生涯にわたり看護専門職として幅広い領域で社会に貢献する人材養成の理念が掲げられている。そして、看護実践能力を習得した質の高い看護専門職の育成が課題となっている。

一方、医療現場では、患者の権利意識の向上に伴い、患者の要求は多様化してきている。看護師は、患者が安心して治療に専念できるよう入院中の生活を支え、安全・安楽な看護実践が責務である。看護基礎教育機関は、看護実践能力を高めるべく教育内容の充実、効果的な教育・学習方法の検討は不可欠である。

看護実践能力を育成するためには、講義・学内演習・臨地実習を連動させ教授していくことが重

要である。特に、学内演習は看護基礎教育のなかで講義と臨地実習を結びつけるもの、臨地実習における患者への実施の事前準備として位置づけられている（園田・花井・小湊・竹生・上原，2011）。実際、各大学において効果的な実習をねらいとした演習が実施されている。近年の傾向として、個人が予習を行ってから授業へ関心をもって臨み、教室ではグループによる探求活動を行うという教育方略が、学内演習にも取り入れられている（草刈・河野・山口・板倉・石綿・鈴木，2014）。本学の成人看護援助論演習Ⅲ「術後観察演習」（以下、術後観察演習とする）においても、視聴覚教材による反転学習を取り入れ、学習効果が高まることが明らかとなった（藤原・高見・三浦・平賀・中本・山中，2017）。

グループによる協同学習の考え方は①互恵的な協力関係、②個人の責任性、③相互作用の促進、④社会的スキル、⑤グループの改善手続きという

1 Yasuyo MIURA 千里金蘭大学 看護学部
2 Naoko FUJIWARA 千里金蘭大学 看護学部
3 Kiyomi TAKAMI 学校法人大阪滋慶学園

受理日：2019年9月6日
査読付

5つの基本要素から成り立つ。これらの要素を備えた学習では、学生が学んだ知識や自分の考えをクラスの仲間と伝え合うことを通して相互の理解が深まり、お互いの価値を認識するようになる。特に学力の高い者はメンバーに教えることによって学業成績も自尊心も高まるという成果が得られている(牧野・江尻・中山, 2014)。また、協同的な学びは、授業の目標達成に効果的に働き、学生の自律的な学習能力の修得と学習意欲に良い影響を与えている(牧野, 2010)。

本学の術後観察演習では、視聴覚教材による反転授業に協同学習(知識構築のサイクル構造モデル)を取り入れることによって、学習活動での学生間の対話や学習記録を用いた内面化などは有効に行っていたという結果が示されている(高見・藤原・三浦, 2018)。

つまり、協同学習による術後観察演習を行うことにより、学生自身が既存の知識をもとに、問題解決のために必要な知識を深め、学内で学んだことを「生きた知識」として成人看護学実習Ⅰ(以下、成人急性期実習とする)の現場で活用し、臨地実習における学習意欲にもつながることが期待できる。しかし、協同学習が成人急性期実習に及ぼす効果については十分な検討がなされていない。したがって本研究では、成人急性期実習における協同学習を取り入れた術後観察演習の学習効果について検討する。

協同学習を取り入れた術後観察演習が成人急性期実習に及ぼす学習効果について明らかにすることで、学生自身が既存の知識をもとに問題解決のために必要な知識を深めることができるであろう。さらに、学内演習や成人急性期実習の教育評価をする上での基礎的資料となり得る。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究の目的

成人急性期実習における協同学習を取り入れた術後観察演習の学習効果について明らかにする。

2. 調査協力者

A大学看護学部の「術後観察演習」および「成人急性期実習」を履修した学生98名に調査を行い、研究参加に同意が得られた74名を分析対象とした。

3. 調査期間

2017年10月から2018年7月

4. 調査内容

成人急性期実習の5クールの各クール最終日に、自記式質問紙を配布し調査を行った。受け持ち患者の概要、演習資料の活用、成人急性期実習における事前学習の取り組み、成人急性期実習における術後観察の経験について質問した。それぞれの質問についてどの程度あてはまるか0から10の数字を選択してもらい、さらに自由記述で回答を求めた。術後観察経験の実際については、経験した回数を見学のみ～4回以上の6段階評定で回答を得た。また、本研究では、学習効果の指標として、主体的授業態度尺度(畑野・溝上, 2013)、特性的自己効力感尺度(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)を用いた。尺度の使用に関して、開発者に許諾を得た。

主体的授業態度尺度は、「課されたレポートや課題を少しでもよいものに仕上げようと努力する」といった授業に対する主体的な態度を表す9項目からなり、信頼性と妥当性が十分に検討された1因子構造の尺度である。本調査にあたり、開発者の了解を得て、看護学生用に項目の文言を一部改変し、“あてはまらない～あてはまる”の5件法で回答を求めた。

特性的自己効力感尺度は、Sherer et al. (1982)が開発したSE尺度を翻訳し、信頼性と妥当性が十分に検討された23項目1因子構造の尺度である。社会的スキルや職業能力の視点から、行動を起こす意志、行動を完了しようと努力する意志、逆境における忍耐などから構成されており、“そう思わない～そう思う”の5件法で回答を求めた。

5. 分析方法

各尺度得点を従属変数とし、演習資料の活用、術後観察演習の活用、成人急性期実習における事前学習の取り組みの程度、成人看護学実習における術後観察の経験回数を独立変数として重回帰分析を行った。自由記述は、概要を集約した。分析には、IBM SPSS Statistics 19を使用した。

Ⅲ. 倫理的配慮

研究目的、方法について口頭と書面で説明し同意を得た。また、研究への参加は自由意思であり、

研究への協力を途中で中止が可能であること、不参加による学業上の一切の不利益を被らないことを丁寧に説明した。

個人情報の匿名性確保のため質問紙は無記名とした。研究参加への同意を熟考できる時間を設け、参加の自由を保障するため、回収は留め置き法とした。なお、質問紙への回答用紙を所定の回収箱へ投函したことをもって同意とみなした。本調査は、研究代表者所属機関の疫学倫理審査委員会の承認を得て実施した（通知番号324）。

IV. 術後観察演習の概要

1. 学習目標

- 1) 手術を受けてライン類が挿入されている術後患者に、安全・安楽に全身状態の観察を行うための具体的方法について述べるができる。
- 2) 術後の観察の目的や方法を説明することができる。
- 3) 術後における患者の状態を観察・アセスメントすることができる。
- 4) 観察した内容を記録できる。
- 5) 観察を実施するにあたり、患者に適切な説明や声かけができる。
- 6) 術後の観察を実施・評価し、実施上の注意点や工夫および学びについて考えることができる。

2. 知識構築のサイクル構造モデルを取り入れた演習計画（図1）

- 1) 事例：50歳代、女性、大腸（直腸）がんの診断により、全身麻酔下で低位前方切除術を受けた患者。
- 2) ビデオ教材：事前学習として、術後観察の実際について看護師役を教員が行い、オリジナルビデオ教材を制作した。
- 3) 事前学習（各個人：個人思考）
指定の動画視聴、配布資料で自己学習を行う。事前課題レポートについて、事例をよく読み、参考文献や指定されたビデオ教材を視聴し、a患者の状況図示、bチューブ類の目的、c観察方法（具体的な声かけも考えておく）等を記載するよう提示する。
- 4) 演習の実際（ペア・グループ：集団思考）
 - ① 3人1組のグループとなり、演習に先立

ち一人ひとりが考えてきた方法について伝え、自分の考えを表現する。

- ② それぞれに患者役、看護師役、観察者役を体験する。実施中は考えていること、気づいたことなど自分の考えを言葉にし、よりよい方法をグループで話しあいながら進め、3人でのグループで最もよい方法についての意見をまとめる。
- 5) 演習後の振り返り（全体：集団思考）
より高次の同意に向けて2つのグループでさらにグループ編成を行い、実践の評価や実施上の注意点、工夫についてディスカッションを行う。ディスカッションした内容はホワイトボードに記入し整理し、実施後の納得のいく術後観察の方法について共有する。
- 6) 事後課題の提出（内面化）
術後の観察を実践・評価し、実施上の注意点や工夫および学びを600～800字にまとめて提出する。演習前後での自分自身の知識の変化に注目して学びをまとめる。

V. 結果

1. 調査協力者の概要および成人急性期実習における学習状況

調査協力者の平均年齢は21.2歳（SD=1.31）であった。調査協力者の所属する大学は女子大学であったため、今回の調査では性別の質問していない。

成人急性期実習の場面において、術後観察演習に関する資料をどの程度活用したかについて（活用していない0～常に活用した10）は、平均値6.04（SD=2.37）であり、適度に活用ができていたことを示した。また、どの資料を活用したかについての回答では、術後観察演習や講義資料を中心に活用していた。特に、術後観察の手順や実習病棟に関連する疾患について、周術期看護についての内容を実習中に活用していることがわかった。（表1）。術後観察演習が成人急性期実習の場面において、どの程度役にたったか（役に立たなかった0～非常に役に立った10）の問いでは、平均値6.07（SD=2.20）であり、役に立たなかったと思っている学生は少なかったことが伺える。術後観察演習が役に立ったと思う具体的な内容について集約し、表2に示した。術後観察演習を経験することにより、術直後の患者や観察の実際についてイメージすること

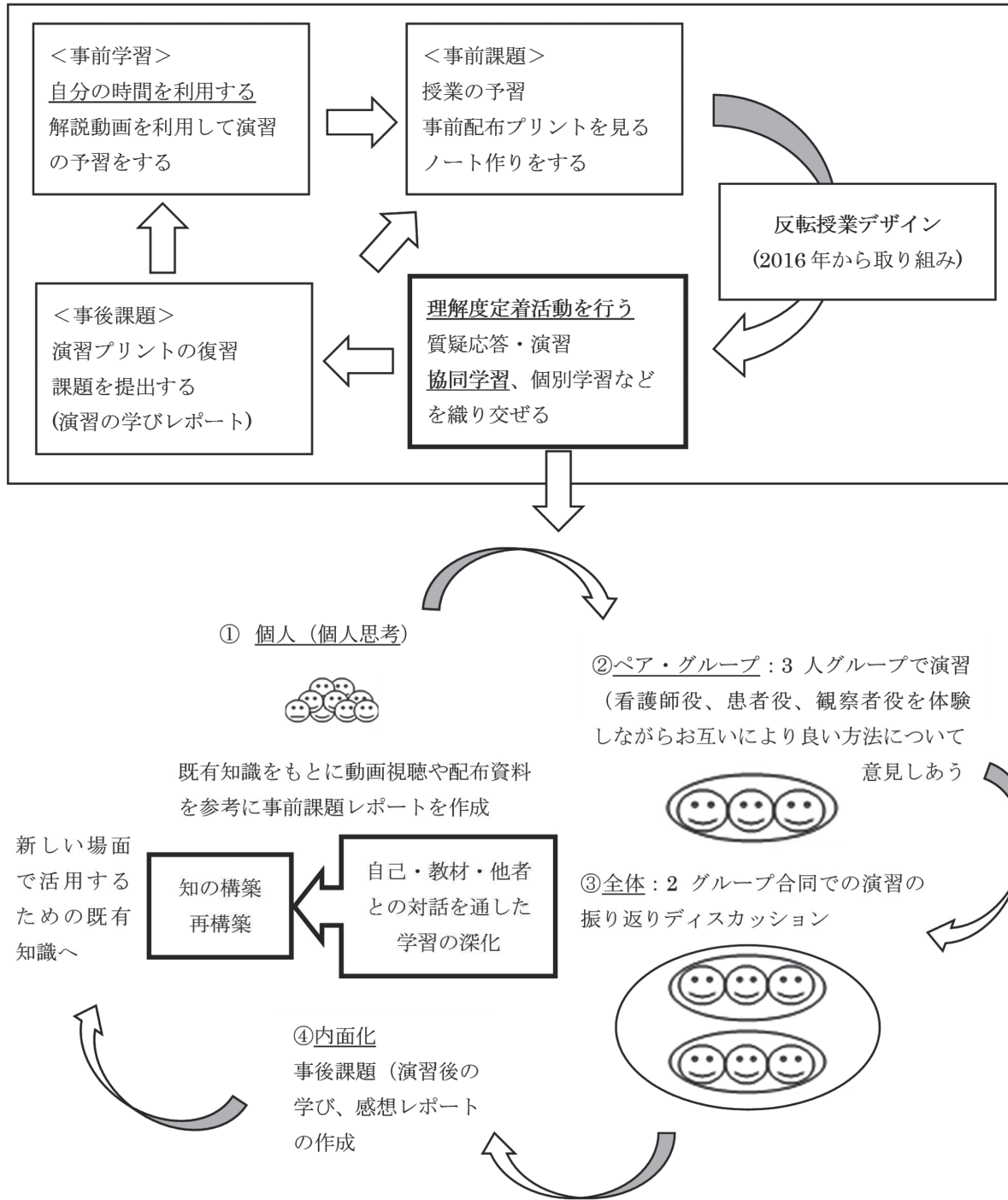


図1 協同学習(知識構築のサイクル構造モデル)による授業デザイン

ができ、実習の場面で役立っていた。

次に、成人急性期実習の前に課される事前課題の取り組みについてどの程度行ったか(行っていない0~提示課題以上に行った10)の問いでは、平均値6.92 (SD=1.63)であった。また、その事前課題に要した時間は平均9.54 (SD= 7.14)日であった。学習時間は個人によって大きく差があるものの、学生は事前に課せられた課題に取り組み、実

習に臨んでいることが示された。

最後に、成人急性期実習の場面において、実際に術後観察を経験した回数の問いでは、平均2.48 (SD=1.42)回であった。術後観察は、術直後および術後1日目を想定しており、学生が見学に留まらず主体的に経験していることが伺える。

表1 実習中に活用した資料の種類 (n=54)

1) 術後観察演習の資料	術後観察の手順・・・16 (名) 観察項目・・・6 術後合併症・・・6 ドレーン管理・・・3 看護過程・・・2
2) 講義資料	実習病棟に関連する疾患について・・・14 (消化器、運動器、循環器など) 周術期看護・・・13 術前・術後観察項目・・・9 ムーアの分類・・・7 麻酔について・・・2 ドレーン管理・・・2
3) 教科書や参考図書	実習病棟に関連する疾患や看護について・・・1 (消化器、運動器、循環器など)

注) 複数回答あり

表2 術後観察演習が役に立ったと思う内容 (n=45)

術直後の患者の状態がイメージできた・・・	11 (25%)
術後の観察項目やアセスメントの仕方・・・	10 (22%)
演習でイメージできていたので、実際どのような観察をすればよいのかわかった・・・	8 (18%)
演習資料が役に立った・・・	6 (13%)
術直後の患者に装着されているドレーンやチューブ類がイメージできた・・・	4 (9%)
覚えていない・・・	2 (5%)
演習でイメージすることができ、実習で患者さんにかかわることができた・・・	1 (2%)
演習時に術後の観察項目や根拠を調べていたので、実際に役に立った・・・	1 (2%)
実際の術後の様子に近いと感じた・・・	1 (2%)
看護師さんの動きを見て、何をしているのか理解しやすかった・・・	1 (2%)

2. 受け持ち患者の概要と手術見学・ICU実習の経験

調査協力者が、成人急性期実習で受け持った患者は147事例であった(学生一人当たりの受け持ち数1.99人)。受け持ち患者の性別は、男性34%(50名)、女性66%(97名)であった。平均年齢は61.9歳(SD=15.09)であった。

成人急性期実習では、2病院を実習施設とし、周術期にある患者を受け持つことができるよう病棟と調整を行っている。患者の主な疾患と麻酔方法およびICU入室の有無を表3に示した。麻酔方法は主に全身麻酔、局所麻酔(腰椎麻酔含む)、静脈麻酔(鎮静)があり、受け持ち患者が受けた手術の約8割は、全身麻酔で行われていた。手術を受けた患者の約24%がICUに入室していた。

また、学生は受け持ち患者に限り、手術見学およびICUでの実習を行っている。62.8%の学生が手術見学を経験しており、18.7%の学生はICUでの実習を経験していた(表4)。

3. 術後観察演習と成人急性期実習との学習効果の関連

特性的自己効力感尺度および主体的授業態度尺度の得点の平均値と標準偏差について、表5・表6に示した。分析対象は、欠損値を除外した69名とした。また、尺度項目の逆転項目を処理した上で、それぞれ合計得点を算出した。特性的自己効力感尺度の合計得点は、平均77.09点(SD=12.88)であった。また、主体的授業態度尺度の合計得点は、平

均35.50点 (SD=5.14) であった。

特性的自己効力感尺度および主体的授業態度尺度の各尺度得点を従属変数とし、「演習資料の活用」、「術後観察演習の活用」、成人急性期実習における「事前課題の取り組みの程度」、「術後観察経験の回数」を独立変数として強制投入法による重回帰分析を行った。

その結果、独立変数に関しては有意な影響を示さなかった。独立変数間の相関は、「演習資料の活用」と「術後観察演習の活用」および「事前課題の取り組みの程度」に正の有意な相関を示し、「術後観察演習の活用」と「事前課題の取り組みの程度」に正の有意な相関を示した (表7)。

表3 受け持ち患者の主な疾患と麻酔方法およびICU 入室の有無

消化器系	胆嚢結石症 結腸がん 肝細胞がん 乳がん 胃がん 鼠径ヘルニア 肺がん 等
循環器系	大動脈弁狭窄症 大動脈弁閉鎖不全症 解離性大動脈瘤 僧帽弁閉鎖不全症 腹部大動脈瘤 等
泌尿器系	膀胱がん 前立腺がん 尿管結石 前立腺肥大症 尿管がん 等
婦人科系	子宮筋腫 子宮体がん 卵巣腫瘍 子宮内膜症 子宮頸部腺がん 等
脳神経系	内頸動脈高度狭窄 脳膿瘍 髄膜腫 慢性硬膜下血腫 ギラン・バレー症候群 等
感覚器系	慢性扁桃炎 顎下線腫瘍 下顎骨骨折 副鼻腔炎 慢性中耳炎 等
運動器系	変形性股関節症 大腿骨転子部骨折 大腿骨頸部骨折 変形性膝関節症 大腿骨骨頭壊死 等
麻酔方法	全身麻酔 107 (77.5%)
(n=138)	局所麻酔 (腰椎麻酔含む) 25 (18.1%)
	静脈麻酔(鎮静) 6 (4.3%)
ICU 入室	あり 34 (24.3%)
(n=140)	なし 106 (75.7%)

表4 学生の手術・ICU 見学の有無

手術見学 (n=145) あり	91 名 (62.8%)
なし	54 名 (37.2%)
ICU 見学 (n=139) あり	26 名 (18.7%)
なし	113 名 (81.3%)

表5 主体的授業態度尺度(項目を一部改変)得点の平均値と標準偏差 (n=69)

	平均値	SD
1) 記録物や課題はただ提出すればいいという気分で仕上げる事が多い (R)	3.51	1.23
2) 課された記録物や課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する	4.16	0.68
3) 記録物は満足いくように仕上げる	4.09	0.76
4) 課題には最小限の努力で取り組んだ (R)	3.62	1.23
5) 課題は納得いくまで取り組む	3.75	0.74
6) 単位さえもらえればよいという気持ちで実習に出る (R)	3.96	1.10
7) 実習には意欲的に参加する	4.29	0.86
8) 実習はただぼうっと聞いている (R)	4.64	0.57
9) プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫なように十分調べる	3.48	0.80
合計	35.50	5.14

注1) 項目の変更箇所を太字で示した

注2) (R) は逆転項目を示す

表6 特性的自己効力感尺度得点の平均値と標準偏差 (n=69)

	平均値	SD
1) 自分が立てた計画はうまくできる自信がある。	3.19	0.90
2) しなければならないことがあっても、なかなかとりかからない。(R)	3.26	1.11
3) 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける。	4.03	0.66
4) 新しい友達を作るのが苦手だ。(R)	3.49	1.22
5) 重要な目標を決めても、めったに成功しない。(R)	3.46	0.90
6) 何かを終える前にあきらめてしまう。(R)	3.65	0.95
7) 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人のところへ行く。	3.84	1.07
8) 困難に出合うのを避ける。(R)	2.91	1.08
9) 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない。(R)	2.90	1.15
10) 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう。(R)	3.36	1.03
11) 面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる。	3.74	0.89
12) 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる。	3.38	1.04
13) 新しいことを始めようと決めても、出だしでつまづくとすぐにあきらめてしまう。(R)	3.51	1.01
14) 最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめしないで友達になろうとする。	2.97	0.98
15) 思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない。(R)	3.25	0.96
16) 難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない。(R)	3.75	0.86
17) 失敗すると一生懸命やろうと思う。	3.84	0.83
18) 人の集まりの中では、うまく振る舞えない。(R)	3.17	1.21
19) 何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる。(R)	2.26	1.05
20) 人に頼らない方だ。	3.09	1.01
21) 私は自分から友達を作るのがうまい。	2.93	1.08
22) すぐにあきらめてしまう。(R)	3.58	1.08
23) 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない。(R)	3.52	1.07
合計	77.09	12.88

注) (R) は逆転項目を示す

表7 独立変数間の相関関係

	演習資料の活用	術後観察演習の活用	事前課題の取り組み程度	術後観察経験の回数
演習資料の活用	1.00			
術後観察演習の活用	.62**	1.00		
事前課題の取り組み程度	.28*	.29*	1.00	
術後観察経験の回数	-.16	-.15	-.04	1.00

VI. 考察

1. 成人急性期実習における術後観察演習の活用

本研究の結果から、学生は成人急性期実習において、術後観察演習の資料を活用し、実習に臨んでいた。特に、術後観察の手順や観察項目、術後合併症について資料を見直しており、実際の看護場面で役立つ資料であったと考えられる。また、術後観察演習が役に立ったと思う内容では、「術後の観察項目やアセスメントの仕方」、「術直後の患者の状態のイメージができた」、「演習でイメージできていたので、実際どのような観察をすればよいのかわかった」などと回答しており、演習場면을具体的に想起しながら実際の術後観察を実践していることが示された。

学生は術後観察演習を履修し、約3か月後から成人急性期実習を履修することとなる。臨地実習前の学内演習は、看護技術の習得に意識が向けられ、実習への適応性が向上することから（内藤・御田村, 2016）、術後患者の具体的なイメージをもちながら実習に臨むことができたのではないかと考えられる。

また、知識構築のサイクル構造モデルの個人思考の段階において与えられた事前学習に始まり、演習の実際・振り返りの集団思考、内面化を促すための事後課題によって演習資料が完成する。つまり、学生間の相互作用での刺激により学びのための課題が明確となり、学生個々が熱心に演習に取り組んだ結果、完成した資料を実習の場面でも活用でき、術後観察の経験につながったと推察される。

したがって、術後観察演習の有用性は高く、学生が成人急性期実習において十分に活用できる内容であることが示唆された。

2. 成人急性期実習における術後観察演習の学習効果の検討

本研究は、成人急性期実習における、協同学習を取り入れた術後観察演習の学習効果について明らかにすることを目的とした。

近年、低侵襲手術の普及に伴い、患者の術後回復経過が早く、在院日数が短縮化している。成人急性期実習において、学生が受け持つ患者も例外ではない。故に、学生自身が主体性をもって実習に臨まなければ経験できない技術も多い。本研究の結果、成人急性期実習では、約8割の学生が全

身麻酔下で手術を受ける患者を受け持ち、約6割の学生が患者の手術を見学していた。また、学生が実際に術後観察を経験した回数は平均2回以上あり、見学や未経験ではなく、積極的に患者にかかわることができていたと考えられる。

これは、術後観察演習において、学生全員が術直後および術後一日目を想定した、安全・安楽に観察を行うための一連の技術を経験していることが関連していると考えられる。実習前の演習は、代理体験により成功体験をもたらすことが不安の軽減につながる（園田・花井・上原, 2008）。つまり、協同学習において、演習でうまくいかない状況で、どうすればうまくいのか、どのような知識がさらに必要なのか、技術が必要となるのかを相互に話し合い学びあっていく中で、より良い方法へと導かれることで成功体験に結びつき、自信につながったことが推察される。したがって、今後も学生が成功体験を経験でき、実習への主体的な参加につながるよう、アドバンス的な学内演習を継続して行っていく必要があると考える。

しかし、本研究における重回帰分析の結果、協同学習を取り入れた術後観察演習と成人急性期実習における学習効果を明らかにすることはできなかった。今回の研究では、成人急性期実習各クール最終日に調査を実施したが、学生によって演習履修後から成人急性期実習までの期間にばらつきが見られた。また、サンプルサイズは検定するにあたり十分であったと考えるが、独立変数が従属変数に及ぼす影響として、演習グループの編成やグループ内でのディスカッションなど、協同で演習に取り組む姿勢や演習の参加度を含め、協同学習に関する要因の検討が不足していたことが伺える。特に、知識構築のサイクル構造モデルにおける思考段階との関連やグループ学習における影響など検討していくことが望ましいと考える。さらに、実習の物理的・人的環境等の影響も考慮し、要因を探索していくことが今後の課題と考える。

VII. 結論

成人急性期実習における、協同学習を取り入れた術後観察演習の学習効果について検討した結果、以下のことが示唆された。

1. 学生は成人急性期実習において、術後観察演習の資料を活用し、実習に臨んでいた。
2. 学生は成人急性期実習において、術後観察演

習を具体的に想起しながら実際の術後観察を
実践していた。

3. 術後観察演習は、成人急性期実習において、十分に活用できる内容であった。
4. 学習効果との関連は明らかにできなかったが、術後観察演習で学生同士の相互作用により自分の考えを見直す機会になった。
5. 知識構築のサイクル構造モデルにおけるグループ学習の影響を含め、協同学習に関する要因のさらなる検討が課題となった。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、A大学（奨励研究）研究助成金を受けて実施した。

文献

- 藤原尚子, 高見清美, 三浦恭代, 平賀元美, 中本明世, 山中政子. (2017). 成人看護学演習『術直後の観察』における反転授業を取り入れた学習の有効性. 日本看護教育学会第27回学術集会プログラム・講演集, 129.
- 畑野快, 溝上慎一. (2013). 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討. 日本教育工学会論文誌, 37(1), 13-21.
- 草刈由美子, 河野かおり, 山口久美子, 板倉朋世, 石綿啓子, 鈴木純恵. (2014). タブレット端末(iPad)を用いた基礎看護技術講義・演習の授業評価－学生のアンケート結果から－. 獨協医科大学看護学部紀要, 8, 31-38.
- 牧野典子. (2010). 看護学の授業における協同的な学びが目標達成に及ぼす効果. 人間関係研究, 9, 85-100.
- 牧野典子, 江尻晴美, 中山奈津紀. (2014). 成人急性期看護学における協同的学び合いを取り入れた事前学習セッションの提案. 中部大学教育研究, 14, 75-79.
- 文部科学省. 「大学における看護系人材養成の在り方検討会最終報告」(2011). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf (2019.8閲覧)
- 内藤恭子, 御田村相模. (2016). 実習前の学内演

習が在宅看護技術経験に与える効果－在宅看護に特徴的な看護技術の経年変化から－. 第46回日本看護学会論文集看護教育, 31-34.

- 成田健一, 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, 長田由紀子. (1995). 特性的自己効力感尺度の検討－生涯発達の利用の可能性を探る－. 教育心理学研究, 43(3), 306-314.
- 園田麻利子, 花井節子, 小湊博美, 竹生真規上原充世. (2011). 実習前演習の評価. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 15, 29-42.
- 園田麻利子, 花井節子, 上原充世. (2008). 自己効力感を高める実習前演習のあり方の検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 12, 64-81.
- 高見清美, 藤原尚子, 三浦恭代. (2018). 目標創出型授業デザインによる術後観察演習の試み. 日本看護学教育学会第28回学術集会プログラム・講演集, 160.

